井上円了が志したものとは

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　佐々木　司

はじめに：

井上円了は、「諸学の基礎は哲学にあり」という教育理念をかかげ、「余資なく優暇な者」でも学べる場を作るべきという考え方から、29歳という若さで「哲学館」を設立した。

また、大学の学長辞任後、社会教育を行うにあたって拠点とした「哲学堂」が、現在、中野区哲学堂公園として一般に公開されている。明治37年に建てられた「四聖堂」には、東洋哲学の孔子と釈迦、西洋哲学のソクラテスとカントの「四聖」がまつられている。私は、学生時代、中野区に住んでおり、「哲学堂」というのが、区内にあることは、知っていたが、一度も訪れたことは、なかった。この機会に是非、行ってみたいと思う。

哲学館では哲学、心理学、社会学など西洋の諸学の科目を開講したほか、創立半年後には遠隔地の人も学べるよう、現在の通信教育に当たる「館外員制度」も設置した。教室での講義を筆記印刷した「哲学館講義録」を発行して、全国各地の人々に学習の機会を開放した。この制度への応募者は、翌年には1831人にものぼったという。

　こうして体制を整えた後も、円了の教育への情熱はやむことはなかった

2019年6月22日に東洋大学白山キャンパスで開催された100周年記念講座「井上円了の見た世界」（第2回）の資料によると：

円了は、3回の海外旅行に行き、その目的は、次のように記載されている。

海外旅行の目的（「欧米各国正教日記」の記述）

・政府の事業は、民間の事業に及ばず

・国の本（元）は精神にあり

・「無形上の文明」を進歩させる

・宗教の必要性

・独立を維持させるのに必要な要素は言語・歴史・宗教の3つ

　円了は早くから「日本人が海外で渡り合えるように教育すべき」と提言しており、近代化を進める日本において新たな役割を担う教育家や宗教家、哲学家を育成しようとしていたようである。これを達成するためには世界各国の教育を知り、外から日本の教育を見る経験が不可欠と考え、世界旅行に出かけている。　円了は世界旅行で得た知見を大学教育に生かすだけでなく、それを民衆に広める活動も精力的に行っている。その一つが、日本各地を巡って講演を行う「全国巡回講演」である。当初は哲学の普及や哲学館の資金募集を目的としていたが、2回目の世界旅行から帰国した後は、社会教育や生涯学習の普及を目的として、言論の自由や人格の尊重、社会道徳を軸にして行われた。この巡回講演は生涯にわたって続き、円了は計5291回、130万人以上にも及ぶ人々に、ものの見方や考え方を伝授して回ったという。

これらから円了は、世界を見渡す広い視野と、優れた実践力を兼ね備えた人物であり、明治期を代表する教育者であり国際人だったと言えるだろう。

「哲学館」の経営は、苦しかったようである。国立の学校は国家から金が出るが、私立の学校は、生徒の授業料だけであり、これが思うように集まらないとなると、経営は行き詰まる。

そこで、円了は、「寄付」に頼るしかなかった。「哲学」を教えるという学校の性質から、大口の寄付は、望めなかったのようである。円了は全国を巡り、講演を行いながら、寄付を募った。講演会場の多くは、浄土真宗のお寺が多かった。当時の浄土真宗の門徒は、圧倒的に農家が多かったので、訪問先は、主に農村であった。そこは近代思想も科学も届きにくい世界であったから、人々は、いわゆる「迷信」に左右されることが多く、円了はそういう迷信の打破もテーマに掲げざるを得なかった。このことが、後に、彼を「妖怪博士」の異名をとらしめることになった。

　明治時代は、多くの人々はまだ迷信や妖怪を信じ、奇怪な現象「こっくりさん」が蔓延して社会現象になっていた。この調査を行い原因を解明する円了は、妖怪や怪奇現象の現象究明にも奔走した。自分で考え真偽を見極めることが大事とする「妖怪学」やものの見方、考え方を鍛えるには、哲学が必要と考え全国巡業の旅で講演を実施した。

最後に：

　私は、現在，66歳。60歳で会社を定年退職し、3年間ほどのんびりとした生活を送っていたが、ある日、市の広報紙で「働く意欲があり、児童の教育に関心のある方を募集します」との記事を見つけ、何か社会に貢献できることをしてみたいという希望もあり、応募し、採用された。今、市内の小学校で学級支援員として学級担任のサポートをして子供たちの教育に関わる仕事をしている。以前から児童の教育に関連する仕事をやってみたいこともあり、未来を支える子供たちの教育に関わることができ満足している。

　東洋大学の創立者の井上円了は、著名な哲学者・教育者であり、渡航が容易でなかった明治の時代に3回にわたる世界視察を行った。早くから国際教育の必要性を提言し「諸学の基礎は哲学にあり」との理念の下、東洋大学の礎を築き、教育に情熱を注ぎ続けた生涯は、時代を先取りした深い洞察力があった。現在、私は、児童教育に関連する仕事に携わっているが、円了のめざした生涯教育というものに少しで近づけることができれば、幸いである。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上